

〔新刊紹介〕

野村倫子氏著

『源氏物語』 宇治十帖の継承と展開―女君流離の物語―

須藤 圭

源氏物語という物語が後代にいかなる影響を与えたのか。さまざまな方法をもって究明され続けているこの問題に、真摯に答えてくれる一書として、野村倫子氏『源氏物語』 宇治十帖の継承と展開―女君流離の物語―がある。本書の目次は以下のとおり。

はじめに

I 「宇治十帖」 浮舟入水を廻る人々

II 「山路の露」―「夢浮橋」の継承と展開―

III 「狭衣物語」 飛鳥井の物語

IV 姫君近侍の女房達

V 物語の女院たち

初出一覧

あとがき

キーワード

索引

詳述しておくのと、Iに四章、IIに二章、IIIに七章、IVに三章、Vに二章の計十八章が収められる。初出一覧によれば、本書に収載された論考のうち、もつとも早いものが一九八三年五月、遅いものが二〇〇九年三月であるから、著者のおよそ四半世紀の研究成果がまとめられていることになる。

本書でとりあつかわれるのは、源氏物語や狭衣物語、鎌倉時代に成立した複数の作り物語に至るまで幅広く、同時に史実への視座も確保されている。多岐にわたる問題意識がときに論旨を煩雑にしているところのないわけではないものの、一貫していることは、後代の物語において、源氏物語の詞章の引用、場面の引用、人物造型の引用といった〈継承〉を分析し、その上で、引用をどのようにもどき、あるいは、ずらししていくかという〈展開〉のありかたを解明

しようとする姿勢である。

私の関心に沿って述べるのであれば、狭衣物語が「かの「桜を避きて」とて、花の下にやすらひたまへりし御さまを、その折は見しかど、」（巻四、新編全集②二三八頁）といった、源氏物語の正編の続きであろうとすること（後藤康文氏『狭衣物語論考 本文・和歌・物語史』第一部1「もうひとりの薫」（笠間書院、二〇一一年 初出・「語文研究」六十八（一九八九年十二月）ほか参照）は、源氏物語が蜚卷の物語論などをおして、自らが物語であるという〈現実〉に对峙しようとしたこととは対照的に見えるが、こうした叙述をたんに引用とずらしということはたやすい。本書は、源氏物語という〈現実〉に立ちむかう後代の物語の姿をありありと、そして丁寧な解きほぐしてみせる。

源氏物語と、狭衣物語をはじめとする源氏物語以後の物語とのあわいにふれる。本書から得られる刺激は極めて大きい。なお、本書には、斉藤昭子氏による書評がそなわ（『日本文学』六十一―一三、二〇一

二年三月)。あわせて参照されたい。

(和泉書院、二〇一一年五月 A5版 四

〇七頁 定価二二〇〇円+税)

(すどう・けい 本学非常勤講師/日本学  
術振興会特別研究員)